

<b>Title</b>	博愛か偽善か?: 19 世紀ロンドンの貧しい子どもたちの表象
<b>Author</b>	田中, 孝信
<b>Citation</b>	人文研究. 66 卷, p.105-126.
<b>Issue Date</b>	2015-03
<b>ISSN</b>	0491-3329
<b>Type</b>	Departmental Bulletin Paper
<b>Textversion</b>	Publisher
<b>Publisher</b>	大阪市立大学大学院文学研究科
<b>Description</b>	高坂史朗教授退任記念

Placed on: Osaka City University Repository

## 博愛か偽善か？ —19世紀ロンドンの貧しい子どもたちの表象—

田中孝信

『荒涼館』の道路掃き少年ジョーのような浮浪児に対して、中・上流階級から成る中心世界は憐れみと恐怖を抱く。しかし、彼らに対する眼差しには別の感情も見て取れるのではないだろうか。本論では、憐れみと恐怖の対象としてのロンドンの貧しい子ども像を様々なテキストや写真や絵画に探った上で、その範疇に収まらない眼差しを、世紀末イースト・エンドでセツルメント活動に従事するエリート男性たちとその地区の少年たちとの係わりの中に見ていった。結果として言えるのは、中心世界は子どもたちを「異質なもの」として眺めていたということだ。それは、現実を必ずしも直視しない、利己主義と利他主義が縋り交ぜになった勝手な捉え方と言える。エリート男性が少年たちとの間に求めた友愛生活の裏面には利己的な性的感情すら読み取れる。要するに子どもたちに対する眼差しには、見る側の願望や欲求が投影されるのであって、それが子どもを貧困や無知から救済するという効果をもたらしたのは事実としても、一方で、無償と見えても、無私を装うものほど自己愛の満身に過ぎないという疑念は拭えない。利他主義に基づく博愛行為の背後には、程度の差こそあれ、利己主義に根差した偽善が蠢いているのである。

### はじめに

ロマン派の詩人ワーズワース (William Wordsworth, 1770-1850) は「子どもはおとなの父である」と言う。この命題からも明らかなように、ロマン派はそれまでのおとなこどもではない、「無垢」の象徴としての子ども像を成立させた。そして、それを基点としてピーター・カヴニー (Peter Coveney) は、1967年に出版された『子どものイメージ』(*The Image of Childhood*)の中で、ロマン派から20世紀に至る文学作品の分析を通して、「無垢」の消長という側面から子ども像を捉えた。それ以来、19世紀という産業革命の進展と家父長制の確立の時代にあって、子どもと子ども時代の本質を当時の作家がいかに認識し描き出しているのかが探究されてきた。特にディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) は、『オリヴァー・トウィスト』(*Oliver Twist*, 1837-39) や『骨董屋』(*The Old Curiosity Shop*, 1840-41) のような前期の作品で成長の停止願望や死による魂の不滅を謳う一方で、『大いなる遺産』(*Great Expectations*, 1860-61) のような後期の作品になると冒頭から「経験」の世界に投げ出される子どもを描き出す。そうしたディケンズ作品の子ども像の変遷に着目したマルコム・アンドリュース (Malcolm Andrews) の『ディケンズと成人した子ども』(*Dickens and the Grown-up Child*,

1994) は、子ども時代と成人期の複雑な関係に焦点を当てた優れた研究書である。また国内に目を向ければ、19世紀英米文学における子ども像の「天使としての子ども」から「子どもとしての子ども」への変遷を辿った松村昌家編『子どものイメージ』(1992)などが出版されている。ただ、惜しむらくは、これらが対象とするのは、主として中産階級の子どもなのである。もっとも、19世紀のほとんどの文学者が勃興する中産階級に属することや、都市労働者の貧困問題を背景として1840-50年代にかけて流行した社会問題小説においても対象とされたのは大人の男女であったことを考え合わせれば、仕方のないことかもしれない。労働者階級の子どもが中心に据えられた作品は一部の児童文学を除いてなく、したがって研究もほとんど進んでいなかったと言っても過言ではない。だが私たちは、19世紀に貧しい子どもたちを救済するための工場法、鉱山法、児童虐待防止・保護法といった法律が制定され、また、貧民学校のような教育機関も組織されたことを知っている。世紀の後半になると、多くの慈善活動家や宗教家たちがスラム街を探検し、子どもたちを野蛮な状態から引き上げようとした。文学作品においても、たとえ中心に据えられなくとも、彼らの生活が描き込まれる。そうした社会の動きを考慮すれば、労働者階級の子どもに、スラム小説を始め新聞雑誌記事の分析など様々な角度から、もっと光が当てられてしかるべきなのである。その意味で、2005年に出版されたトロイ・ブーン (Troy Boone) の『最暗黒のイングランドにおける若者たち』(*Youth of Darkest England*) は、都市の貧しい子どもたちの表象をヴィクトリア朝とエドワード朝の帝国文学を中心に追った注目すべき書と言える。大英帝国の枠組みの中に彼らを組み込むためのイデオロギー教育にいかん文学作品が加担したのか、そしてその企てははたして成功したのかどうかを十分な証拠を挙げながら論じたものである。ただ、この書物は、あくまで大英帝国に従順な若者の育成という点に絞って論じられており、中・上流階級から成る中心世界自体が貧しい子どもたちにどのような類いの眼差しを向けていたのか、そこに見られる後者への決して一面的ではない心的態度にまで入り込むという姿勢が欠けているように思える。その点を探ることは、慈善活動の実態の精査・再評価にもつながるほどに重要な事柄であり、従来の19世紀イギリス文学および文化研究で看過されてきた観点なのだ。

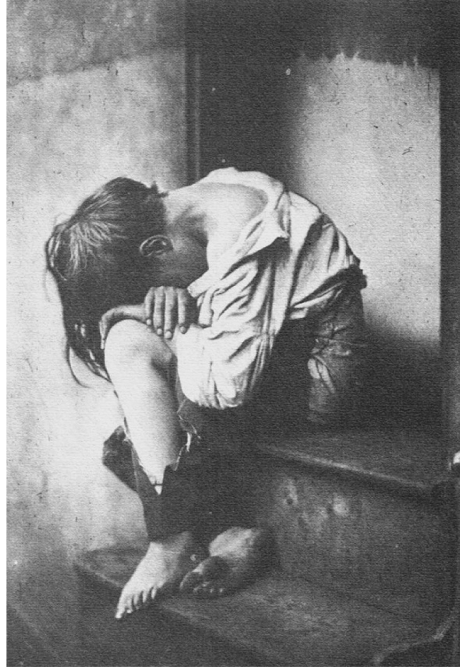
もちろんのことながら、多くの作品でロンドンを舞台にしたディケンズ文学には、貧しい子どもたちも登場する。その中でも、浮浪児と言え、私たちはすぐに『荒涼館』(*Bleak House*, 1852-53)の道路掃き少年ジョー (Jo) を思い出すほどである。彼の姿を通して語り手は読者に憐憫の情を喚起し、ジョーの死に際して「胸の内に神のごとき慈悲心を宿しておられる皆さま方、死んだのであります、同胞の一人が。そして我々の周囲には毎日このようにして死にゆく者がいるのです」(649)と訴える。ディケンズはジョーのような浮浪児に救済の手を差し伸べる必要性を説くわけだが、同時に、ジョーが天然痘を階級の壁を越えてチャーリー (Charley) からエステル (Esther Summerson) へと伝染させてゆく点に注目すれば、中心世界がいかんこうした少年の存在を恐れていたのかが窺える。ディケンズは、「ピクチャレスクと発疹チフ

スとがしばしば、何と心変わらぬ友情で結ばれているか」(*Speeches* 250) を認識していたのである。

この憐れみと恐怖といった感情は、ジョーをモデルにした2枚の写真を比較してみても明らかとなる。その写真とは、「芸術的写真の父」O・G・レイランダー (Oscar Gustav Rejlander, 1813-75) の「かわいそうなジョー」(“Poor Jo,” 1860年頃)〔図1〕と、それをもとに撮られた、バーナード・ホームの創設者トマス・ジョン・バーナード (Thomas John Barnardo, 1845-1905) の「途方に暮れて」(“Lost,” 1871)〔図2〕である。前者のぼろ着をまとった少年は見る者を感傷的な気分へ浸らせる。戸口の壁龕に疲労困憊のあまり意気沮喪して座り込む裸足の少年は、両腕に顔をうずめ、体を胎児の格好に曲げている。むき出しの肩は、彼の若さときゃしゃな体を強調する。交差した腕、内に寄せた足、覆われた目は、彼が外界に対して完全に無力であることを示す。また、顔が見えないがゆえに、見る側は、罪悪感や不安感を引き起こさせるような悲しい凝視や反抗的な眼差しに直面することなく、安心して少年を眺めることができる。顔が見えないがゆえに感傷性が増すのである。それに対して、後者の浮浪児は顔を隠すこともなく、見る者は、その脅えきった、それでいて挑みかかるような強い意志の目つきに魅せられつつも、不安感を覚えるのである<sup>1)</sup>。

だが、『パンチ』(*Punch*) 誌の漫画家ジョン・リーチ (John Leech, 1817-64) や、その流れを汲むフィル・メイ (Phil May, 1864-1903) は、例えば「少年たちにとって素晴らしく愉快なニュース」“Glorious News for the Boys”〔図3〕や「スラム街の体操選手」“Gutter Gymnasts”〔図4〕で、「天敵」である警官の不運を喜んだり、通りを縦横無尽に動き回るストリート・ボーイたちの生き生きとした姿を好意的に描き出す。そこから、ストリート・ボーイに対する眼差しに、憐れみと恐怖だけでは収まらない感情が見て取れるのではないだろうか。本論では、まず憐れみと恐怖の対象としてのロンドンの貧しい子ども像をフィクション、ノン・フィクション、絵画に探り、その上で、その範疇に収まらない眼差しを、世紀末のイースト・エンドでセツルメント活動に従事するエリート男性たちとその地区の少年たちとの係わり合いの中に見てゆく。そうすることで、子どもたちへの眼差しが持つ意味を明らかにしてゆく。

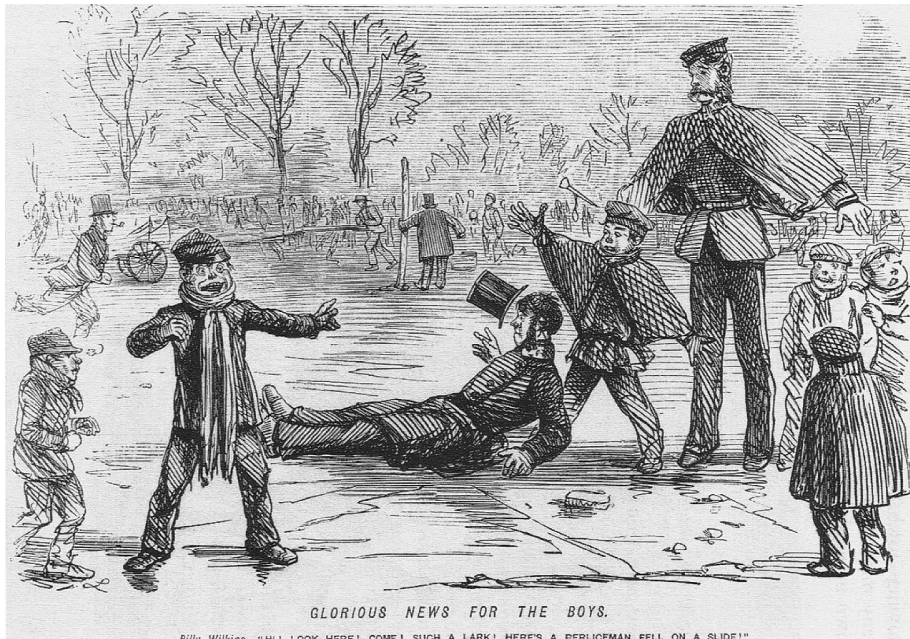
なお取り上げる子どもの性別だが、ジャーナリストのヘンリー・メイヒュー (Henry Mayhew, 1812-87) が「少女よりも少年について遥かに言及しなければならなかった〔……〕。というのも、少年は少女よりも、遥かに街の子どもだからである。女の子は(不道徳な手段に頼らず生計を立てられる場合) 売る以外ほとんど何もできないが、少年は売るのみならず働けるのだ」(1: 471・傍点は原文イタリック) と述べていること、さらには、犯罪が主として少年の問題として捉えられていた点、いたずら好きや生意気な態度が共感の念すら持って描かれているのが少年だった点などに留意して、少年を中心に据えることにする。



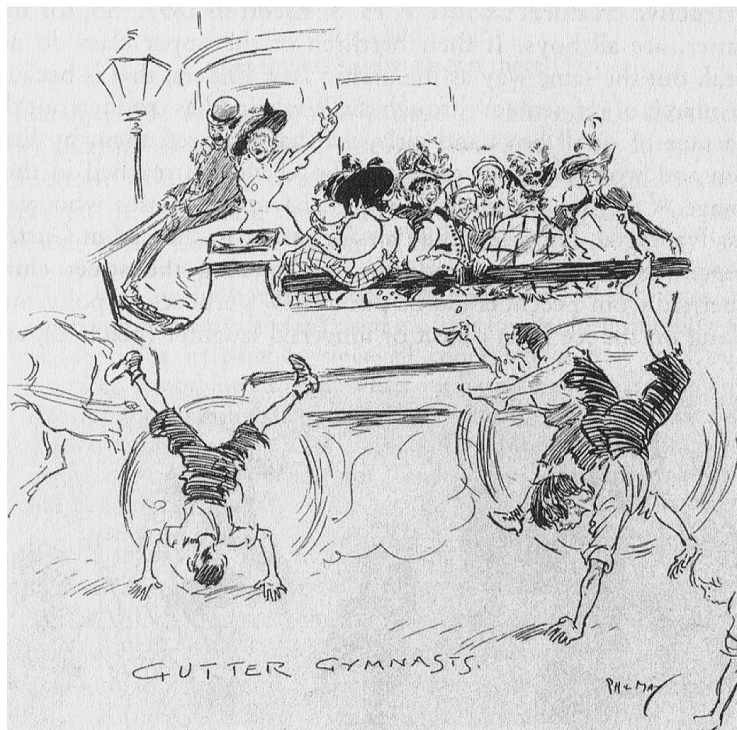
〔図1〕“Poor Jo” (c. early 1860s)



〔図2〕“Lost” (1871)



〔図3〕“Glorious News for the Boys” (1859)



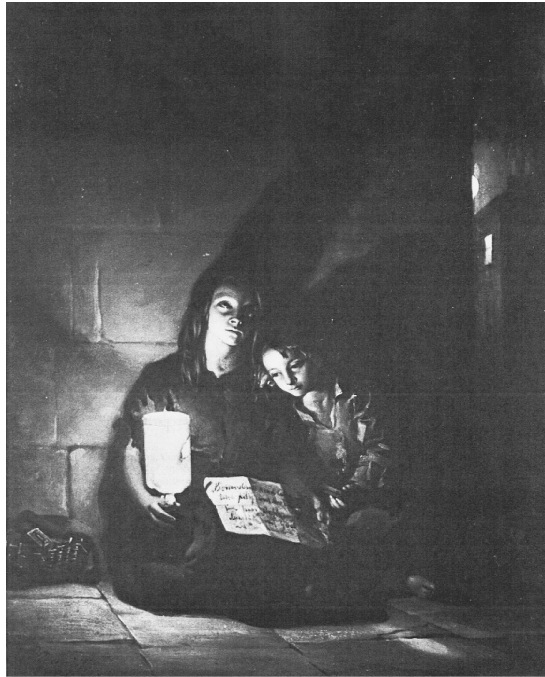
〔図4〕“Gutter Gymnasts” (1896)

## 1 犠牲者としての子ども

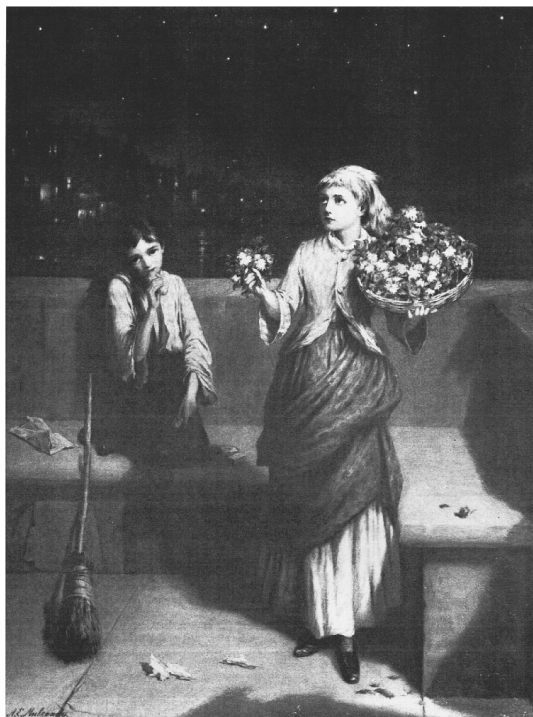
19世紀初めのロマン主義に端を発するヴィクトリア朝の子ども礼賛の流れの中で、無垢な子どもは、冷笑的で浅薄な大人の犠牲者と思なされるようになる。そして、世紀も半ばになり社会が落ち着いてくると、浮浪児に対しても、チャーティスト運動や「二つの国民」に代表される不穏な「飢餓の40年代」に比べて、遥かに穏やかで寛容な態度が示されるようになる。彼らもまた、感傷的に捉えられるようになるのだ。1838年にすでにドクター・ケイ (Dr. Kay, later Sir James Kay-Shuttleworth, 1804-77) が述べていたように、「子どもは『貧民』という語が一般に理解されている意味では貧民であろうはずがない。すなわち、子どもは、自らの勤勉さ、技術、儉約の念、深慮の欠如の結果として窮乏しているはずがない。[……] 救貧院で扶養されている貧しい子どもたちは、自らの過ちゆえではなく不幸ゆえに、世話になっているのである」(Pinchbeck 2: 504) と広く見なされるようになるのである。

かくして文学作品や絵画に浮浪児がテーマとして取り上げられた際、中・上流階級は、貧しい人々への同情の念の適切な捌け口を見出したたわけである。例えば、ウィリアム・ダニエルズ (William Daniels, 1813-80) の『マッチを売る二人の子ども』(*Two Children Selling Matches*, 1851) [図5] は、ぼろ着をまとった少年と少女を描き出す。不自然な光に照らし出された子どもたちは清潔で、十分に栄養が行き渡っているように見える。大きく見開いた少女の目は、天を仰いで涙を流している。絵の持つ道徳的含意が、子どもたちの前に置かれた大きな紙に書かれた「慈悲深き [……] 憐れみたまえ」の文句によって強調される。A・E・マルレディ (Augustus Edwin Mulready, 1844-1904) の『ロンドンの道路掃き少年と花売り少女』(*A London Crossing Sweeper and Flower Girl*, 1884) [図6] では、ロンドン・ブリッジの石のベンチを舞台に、夜空の星の明かりがテムズ河にきらめく中、清潔な子どもたちの表情は、憐れみを求めているかのようである。感傷的なタブローを形作るために、労働は単なるジェスチャーにさえ思えてくる。

浮浪児に社会の目を向けさせた文学のジャンルとして忘れてはならないのが、一群の「浮浪児物語」“waif stories”である。このジャンルの作家たちは、19世紀中期に出版されていた浮浪児やスラム街に関する報告書、雑誌記事、ディケンズの小説のような文学作品の影響を強く受けていた。1860年代半ばから90年代初頭にかけて、特に福音主義者の女性によって書かれたものであり、一般の出版社から出る場合もあれば、宗教冊子協会のような宗教団体から出版されるものもあった。中心となる子どもは憐れみの対象になるほど貧しく、親の支援が受けられない。親は死んでいるか、行方不明か、子に暴力を振るう。こうした状況の中で子どもは、ヘズバ・ストレトン (Hesba Stretton, 1832-1911) の『ジェシカの最初の祈り』(*Jessica's First Prayer*, 1867) に典型的に示されているように、福音主義的キリスト教に出会い改宗し



〔図5〕 *Two Children Selling Matches* (1851)



〔図6〕 *A London Crossing Sweeper and Flower Girl* (1884)



てゆく。のみならず大人をも改心させてゆく。作者の目的は明らかに教訓的である。もちろん性の問題は一切排除される<sup>2)</sup>。したがって、主たる読者である平均的な中産階級の子どもたちに「浮浪児物語」を安心して供給することができ、彼らは憐憫の情と信仰の大切さを学ぶ。ただその一方で、主人公と読者との間には自ずと距離が設定され、読者は自分たちの相対的な快適さと安全を確認するのである。

## 2 野蛮人としての子ども

日本語に訳せば同じ「浮浪児」でも、“waif”が憐れみを喚起する一方で、その相補的語である“street arab”は、脅威を与える野蛮な外的存在としての側面を強調する<sup>3)</sup>。彼らはひどい経済状態に置かれ、教育や訓練も受けず、将来は社会の「残滓」として臨時日雇い労務者になるのが一般的だった。中心世界は彼らの貧困を憐れみ、彼らにピクチャレスクな眼差しを送りながらも、親に頼らず己の身を自ら守る彼らが無垢で高潔であるとは決して信じておらず、「正常な」中産階級家族に体现される秩序に、不快なほどに敵対する存在と見なしていたのである。サミュエル・スマイルズ (Samuel Smiles, 1812-1904) が唱える「自助」の精神は大人にのみ適用されるのであって、彼らの早熟さや独立心は社会規範に反し、都市犯罪や売春の予備軍だと考えられたのだ。浮浪児の救済の裏面には、彼らのこうした性向を改善し抑え込むという意図が隠されていたのである。

浮浪児は、1840年代末までには、フィクション、ノンフィクションを問わず、野蛮人と同一視されるようになる。それは、その時期の社会不穏と大きく係わる。1849年にトマス・ベッグズ (Thomas Beggs) は、浮浪児は「依存心を忘れ、涙を流すという才能を失っている——彼らは北アメリカのインディアンのごとくに野蛮で勇ましいのである」というパリの報告書を引き合いに出し、ロンドンにも「パリの危険な階級が大量に産み出した者たちと同じくらいに野蛮で、それらより遥かに手に負えない階級が存在する」(30) と考える。ディケンズ文学において初めて浮浪児が野蛮人として描かれ恐怖の対象となるのは、『憑かれた男』(*The Haunted Man*, 1848) においてであろう。レッドロー (Redlaw) が出会う少年は、「赤子の野蛮人、幼児の怪物、子どもとは無縁の子ども、生き延びれば人間の外形は呈するが、内面は終生単なる野獣に過ぎないだろう生き物」(272) と描き出されるのだ。かつての「高貴なる野蛮人」は誠実な振舞いや率直な顔つきゆえに理想の人間像として高く評価されたわけだが、今や、それらの性質を浮浪児に付与できるのは、文明と教育だけだと考えられるようになる。彼らの存在は国家の存亡に係わる重大事と捉えられるのである。

浮浪児を別種の生き物と見なすこうした姿勢は、前述のように、社会の安定と共に下火になり、寛容な態度が示されるようになる。だが、その姿勢は、世紀末に向かうにつれてスラム問題、特にその象徴と言えるイースト・エンドへの関心が社会的に高まってくると、再び頭をも

たげてくる。バーナードの場合、野蛮な浮浪児に対する恐怖心は、夢の形で示唆される。1867年にステプニー・コーズウェイに最初の孤児院を開設し、それ以降、精力的に浮浪児救済に取り組んだバーナードであるが、彼の定期刊行物『夜と昼』(Night and Day)の記事の中には、彼に対する少年たちの不服従が性的暴力という形で述べられているのである。ジェイムズ・グリーンウッド (James Greenwood, 1832-1929) が変装して、ランベス浮浪者収容所の彼が言うところの男色の世界に降り立った行為 (田中 233-39) をまねて、バーナードは浮浪者に扮して、一夜を場末の安宿で明かそうとする。「一度だけ、自らのアイデンティティをなくし、浮浪者として知られている偉大な階級の一人になろうと思って」(Barnardo 68) 彼は、ミック・ファラル (Mick Farrel) という「しばしば私の夜の旅行に付き添っていたアイルランドの少年」(67) に導かれて安宿に入り込んで行く。バーナードは読者が誤解するのを恐れて、この記念すべきスラミングに向かう動機をことさら念入りに正当化しようとする。理路整然とした文体は、後に続くメロドラマ的な語りと対照的である。

「単に冒険が好きだからという理由だけで、この訪問を考えたわけではなかった。実は、重要な目的を心に抱いていたのだった。すなわち、第一に、ここでの体験を通して、宿泊設備や常連客に関する、より本場で正確な知識を入手する、第二に、宿で出会う、墮落した生活を送り犯罪に手を染めかねない若者たちに、早朝に影響力を行使する、第三に、この訪問で知り合う人物を介して、他の宿をも訪問する、ということだったのだ。もちろん、こうした目的においても、最高位を占めていたのは、私の人生上の主たる願望——貧しい少年たちを路上生活から救い出し、私たちのホームに引き取り、それによって、彼らを福音の響きと影響のもとに置くこと——だった。(68)

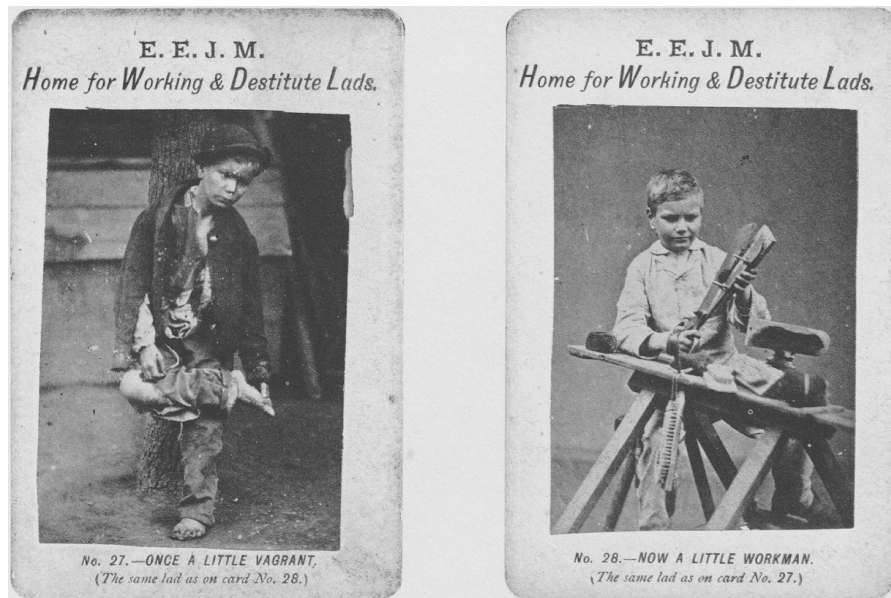
この弁解は、現実離れした出来事への読者の期待を押さえ込むどころか逆に刺激する。バーナードは、シラミのたかったぼろ着を身にまとい、顔と頭を埃で黒くしながら、偽装を楽しむ。そして、35人の裸の少年たちでぎっしり詰まった空間で、衣服を脱ぐと、ぞっとするようなベッドに身を横たえ、恐ろしい夢の世界に堕ちて行く。夢の中で彼の慈善の受益者である浮浪児たちは、彼の身体をひどく傷つけることで復讐しようとする。

「どのくらい眠ったのか分からない——1時間以上ではなかったと思う——突然、恐ろしい夢から目が覚めた。夢の中で私は、同室の者たちに素性を見抜かれ、スパイとして公然と非難されたのだった。その罰として彼らは、私の体中をピンで刺し、それからコショウをこすりつけて復讐した。私は彼らの残忍さに抗議の意を込めてあがいたが、無駄だった。そして今や顔までもピンで刺され、目と鼻にはコショウが押し込まれたかのようなのだ。ひりひりと焼けるようで、ほとんど気が狂いそうになった！ 襲撃者たちに一発お見

舞してやろうとしたが、ベッドから転がり落ちてしまい、そこで突然この不快な夢から覚めたのである。しかし、すぐに目に入ってきた現実には恐ろしいものだった。というのも、ベッドに再び戻り、完全に目が覚めた状態で横になっていると、眠りの中で経験した感覚が、単なる空想ではなかったことが分かったのだ！ ガスランプがまだ燃えており、私は自分の手と腕を見ることができたのだが、それらは刺されて耐えがたいほどにひりひりしていた。みみずばれのように腫れ上がっていたのだ。驚いてベッドに座って、そして——全ての事情が呑み込めた。親愛なる読者の皆さん、次の一文を読まれても、私が誇張しているなどと言ってどうか非難しないでいただきたい。正真正銘本当のことなのだが、シーツは無数の動く虫のせいでほとんど茶色になっており、虫たちは私のベッドと体を自分たちの正当な所有物と見なしているようだったのである。(71-72)

バーナードの読者として私たちは、彼と共に、夢と現実、空想と事実の境界の混乱を体験する。彼はミックを叩き起こして、何とか安宿から暗い通りに逃げ出す。家に帰ったとき、バーナードは自分の顔を認識できない。鏡に映った顔は、かまれて腫れ歪んでいたのである。浮浪者としてのペテンで始まった行為は、異常な化け物に文字通り変身して幕を閉じる。

バーナードのこの夢を私たちはどのように解釈することができるだろうか。その点を考慮するに際しては、記事の出た 1877 年 4 月 16 日という時期に注目する必要がある。春頃から彼や彼の施設は、子どもへの虐待や、寄付金目当ての「対照」写真〔図 7〕の捏造といった欺瞞行為の噂を、バプティスト派の牧師ジョージ・レノルズ (George Reynolds) や貧困に科学的・世俗的な立場から取り組んでいた慈善組織協会によって撒かれていた。それに対してバーナードは 7 月には仲裁裁判所に訴え出ることになる。そうした時期であることを考え合わせれば、この記事は、彼がいくら子どもたちのために己の幸福や安全を犠牲にして慈善行為に精を出しても、結局は周囲から、自己の利益のためとか、単にエリートによる新たな監視に過ぎないといった誤解を受けるのではないかと危惧していたと解釈できる。ただ同時に私たちは、記事に込められた性的ニュアンスを見落してはならない。少年たちを生産的な労働者に高めようとするバーナードの博愛事業は、彼を彼らとの接触によって、忌まわしい野蛮人に墮落させるかもしれない、そうした危険を彼は無意識裡に見取っているのである。裸の少年たちで一杯の、監視の目が行き届かない真っ暗な部屋で、幾多の「ピンで刺す」“pricking pins” 行為が暗示する性的暴力に晒されたとき、彼の身体は、日々ロンドンで性の奴隷と化して売買されていた貧しい子どもたちと同様、自らのものではなくなる。それは、少年たちの、そして害虫や昆虫の「正当な所有物」となってしまうのである。彼の無力さは、少年たちとの間の距離が消滅したことを如実に表す。「ミックのベッドに辿り着くと、私は彼を力いっぱい (lustily) 揺り動かした」(72) という一文における、「(過度の) 性欲、肉欲」を意味する “lust” の副詞形の使用は、性的夢想がもたらしたバーナードの混乱状態を図らずも露呈してしまっているの



〔図7〕 One of Barnardo's "contrasting" portraits of children

ある。

ここに示唆された浮浪児の潜在的脅威は、彼らの生まれ育った環境と密接に結び付く。その一例が、「浮浪児物語」のパロディとしての側面を持つ、アーサー・モリソン（Arthur Morrison, 1863-1945）の『ジェイゴの子ども』（*A Child of the Jago*, 1896）である。世紀末版オリヴァー・トウィストと言えるディッキー・ペロット（Dicky Perrot）は、ベスナル・グリーンの悪名高い地区オールド・ニコルをモデルにした小さなスクエア、オールド・ジェイゴが産み育てた子どもと見なせるほどに、彼の身に降りかかる出来事は全て、環境に起因する。ディッキーという子どもを物語の中心に据えるというのは、19世紀後半における都市の拡大の中、社会改革者たちが唱えた戦略と軌を一にしている。『貧しき人々の子どもたち』（*The Children of the Poor*, 1892）の著者ジェイコブ・A・リース（Jacob August Riis, 1849-1914）は、「貧しい人々の子どもたちの間で働くこと以上に、よりよい見返りを期待できる投資はない」（7）と述べる。スラムでの生活がいかに退化現象を招くかに関する環境論者の主張が増すにつれて、改革者たちは下層階級の子どもたちに理想の市民を作り出す素材を見出すようになる。大人の労働者はスラム生活によって、もはや回復不可能なほどに退化してしまっているのである。モリソン自身もこの線に沿って、イースト・エンドの住民に文化を提供するための施設「民衆の館」の機関誌『パレス・ジャーナル』（*The Palace Journal*）に1889年4月24日に掲載された「ホワイトチャペル」（“Whitechapel”）という論説の中で、「子どもたちは、こうした汚れた片隅に留め置かれてはいけない。彼らの両親は期待するには絶望的であり、たくさんの数の、同様に絶望的な子どもたちの養育を彼らに任せてはならない」（par. 15）

と述べる。したがって、劣悪な環境の中で親によって養育されるということは、破滅を意味する。モリソンは、貧困と犯罪と暴力に支配された地区での生活を描いた『ジェイゴの子ども』について、プリースト牧師 (Rev. W. Priest) に宛てた書簡の中で、「この物語は、そうした環境の中で育てられた子どもたちには見苦しくない生活を送る機会はないということを示すために計画した」(Appendix 168) と述べている。

確かにここでもディッキーへの救済活動が試みられる。彼を神へと導く父の役割を担うスタート神父 (Father Sturt) は<sup>4)</sup>、彼から愛、尊敬、信頼といった通常の父子関係から期待できるものを引き出すのに成功する。だがその試みも失敗に終わる。スタート神父がオリヴァーにとつてのミスタ・ブラウンローだとすると、フェイギンに当たる人物として、ユダヤ人の盗品故買人エアロン・ウィーチ (Aaron Weech) が配置されるのである。ディッキーの向上心を妨げるウィーチは、作品の真の主人公であるジェイゴの生きた道具として、親が元来果たすべき道徳的導き手の役割をパロディ化した人物と言える。彼はディッキーに「父親のように良き助言」(64) を与えると主張するが、実際は、己の利益のために少年を搾取することしか考えていない。彼は親としての権威を自分だけのものにするために、競争相手を積極的に駆逐してゆく。せっかくスタート神父がディッキーを「ジェイゴの悲惨な生活」(93) から脱け出させるために安定した仕事を見つけてやり、彼に階級の上昇の夢を抱かせたにもかかわらず、ウィーチは策略を用いて雇い主のミスタ・グラインダー (Mr. Grinder) にディッキーを首にさせ、彼を再び暴力と犯罪の世界に舞い戻らせる。また、実の父ジョシュ (Josh Perrot) が押し込み強盗の犯人であることを警察に密告し、監獄に送る。ウィーチを通して、「ジェイゴは彼〔ディッキー〕をしっかりと捕えて離さないのである」(162)。その証にディッキーは、喧嘩の最中に、「『ジェイゴ！ ジェイゴ、頑張れ！』〔……〕『さあ来い、スタート神父の子分ども！』」(164) と叫び、今やスタート神父とは完全に袂を分かった人間であることを示す。怨恨ゆえにナイフで刺され、スタート神父に誰にやられたのかと尋ねられても、ジェイゴの掟である「汝、密告するなかれ」(165) を守り死んでゆく。

このような物語展開からは、スラム街の子どもとモリソンと間に距離が読み取れるのではないだろうか。確かにモリソンは、ディッキーの本質的な善良さを描き込む。彼は、妹ルーイー (Looney) をかわいがり、彼女の早すぎる死を家族の中でただ一人嘆き悲しむ。ローパー家から時計を盗み出したことに良心の呵責を覚えた彼は、おもちゃ屋から盗んだオルゴールで、その穴埋めをしようとする。父親が刑に服している間、母や幼い妹や弟のために自分が生活費を稼がねばならないと健気にも責任感に駆られる。環境論に大きく依存しつつも、モリソンは、人間個々のより良い性質は環境によって完全に破壊されるものではない、という立場を取っているのである。だが、そうした性質も、貧困と無知ゆえに、また、ジェイゴの住人だというだけで白眼視する周囲の世界の差別ゆえに、後方に押しやられてしまう。ミスタ・グラインダーがウィーチの言葉を鵜呑みにせず、首になった理由が分からず途方に暮れるディッキーの

「もう一回チャンスをもらえないすか？ どうかお願いします、一所懸命やりますから。おいらは——」(101) という訴えに耳を傾けていれば、ディッキーもまた露店で八百屋を営むまでになったキッド・クック (Kiddo Cook) のようにジェイゴから脱け出し「見苦しくない (decent) 労働者」(93) になることができたかもしれない。ディッキーは、社会から見捨てられ、鬱積したエネルギーを暴力で消費するしかなかったのだ。

網のように彼にくっついて離れないこの耐えがたい麻痺状態は何だろう？ 彼には全てがはっきり過ぎるくらいに分かっていた。しかし、全てはどうでもよいような鈍い気分で捉えられていたのだ。何か乱暴なことでもすれば、少しは気が紛れるだろう —— ハンマーで何かを木端微塵につぶしてしまえば。(163)

作品の最後で、死に際のディッキーはスタート神父に「ベヴァリッジちゃんに伝えておくれよ、別の出口があるってことを —— もっとましなのが」(165) と語る。ディッキーは、ジェイゴから脱け出す道が、ベヴァリッジ老人 (Old Beveridge) の言うように、「高級ギャング」になるか、それとも絞首刑になるか、二つに一つだけ、というわけではないと訴えるのである。そのとき私たちは、彼がもっとまっとうな人生を送ることを望んでいたことを知る。この場面には、それまでモリソンが排除してきた感傷主義が如実に表れ、読者の憐れみを喚起する。ディッケンズが現実をユーモアでくみ、客観性よりも道徳的目的を優先させたのに対して、モリソンはフランスの影響を強く受けたリアリズムの手法に従いながらも、悲惨な環境に置かれた子どもたちの救済を感傷性をも交えながら読者に訴えようとするのである。

しかし同時に私たちは、作品中でジェイゴの住民を表すために頻繁に使用される「ネズミ」“rat” という語に注目する必要がある。赤ん坊の出産に立ち会った外科医はスタート神父に以下のように語る。

「死んでいた方がよかった —— 生まれてこなかった方がもっとよかったと言えないような子どもが、この地区全体の中に一人でもいますか？ にもかかわらず、まさにそうした教区民が生まれてこない日なんてないんじゃないありませんか？ ここにあるのはネズミの巣、ジェイゴなのです。ネズミのみが可能なくらい次から次へと子どもを産むのです。私たちは、それを結構なことだと言います。高尚な道徳的理由に基づいて、私たちはネズミが何千と増える権利を支持しているのです。時折ネズミを一匹捕まえることもあります。そして、それをほんのしばらく飼って、注意深く育てると巣に戻して、同類を繁殖させているのです」(133)

外科医の発言に神父は同意し、事態が絶望的だと思いつつも、自らに課した任務に励もうとす

る。両者に共通しているのは、下層民の増加とネズミの繁殖とを同一視する姿勢である。『憑かれた男』中の浮浪児を表すのにも、レッドローの恐怖心を伴いながら使われていた「ネズミ」(311)は、19世紀において肉体の衛生と精神の衛生との繋がりが発展するにつれて、肉体的および道徳的「汚物」の運び屋という象徴的意味を付与されるようになる (Stallybrass 143)。そうしたネズミに下層民を譬えるという時代の常套手段にモリソンが頼ったとき、そこに嫌悪と共に恐怖を読み取ることは可能だろう。実際、彼自身すでに、先に挙げた論説「ホワイトチャペル」で、「こうした貧しい人々のために新しい建物を建てて何の役に立つというのか？ 彼らはそれらを今と同じくらい不潔なものにしてしまうのである。住人は建物の質を落としてしまうかもしれないが、建物の方は住人の質を変えることはできないのだ」(par. 15)とスラム撤去計画の無益さに言及する。ジェイゴ・コートの撤去を扱った『ジェイゴの子ども』においても彼は、第3版の序文(1897)で、「単なる煉瓦と漆喰としてのジェイゴは消えてなくなった。だが、血と肉を持ったジェイゴは依然として生きており、すでにぎっしりと人で溢れかえっている近隣地区に群がりつつある」(8)と、ジェイゴの住民の内面の改善がいかに困難か、そして彼らが近隣を侵食して行く様が不安げに述べられる。まるで、ディッキーのような、栄養不良や自然との触れ合いの欠如ゆえに年齢の割に身体が歪な発育しか遂げておらず、無目的なエネルギーを持った救いようのない子どもは、ジェイゴのような隔絶された閉鎖空間に閉じ込めておいた方が社会にとって得策であるかのようなのだ。そこには、スラム撤去と住民の生活改善の必要性を訴えながらも、自分たちとはあくまで別種の人間であるという意識が働いていると考えられる。モリソンは、イースト・エンドの出身でありながらその地区から脱出した人間として、イースト・エンド的な生活とは一線を画そうとしているのである。そして読者もまた、書かれたものを通してグロテスクなものを目にしながらも、触れられる心配はなかったのである。憐憫の情に見られた距離がここでも保持されており、憐れみと恐怖が表裏一体のものであることを私たちは再認識するのだ。

### 3 子どものエネルギー礼賛

1880年代から90年代にかけてのイースト・エンドでのセツルメント活動において、労働者階級の子どもを持つエネルギーは、肯定的に捉えられる傾向が見受けられる。その中心になったのが、パブリック・スクールからオックスフォード大学やケンブリッジ大学に進み、その地区で活躍した社会改革者や宗教家たちであった。学生時代に男だけの世界を構築していた彼らは、富める者に対する貧しき者の深い怨恨を静めるために階級の壁を越えて労働者階級の男たちとの絆を求めると同時に、その階級の子どもたちに自分たち自身の子どもの時代の体験や読書から導き出した理想の子ども像を重ね合わせるのだった。少年たちのいたずら好きは、生来、少年が持つべき活力の証と見なされたのである。

イースト・エンドの少年たちは、疑いもなくいたずら好きで、破壊的でさえある。その点に関して言えば、全ての少年がそうだ。もし上流階級の少年たちが、イースト・エンドのわんぱく小僧たちと同じような性質を帯びて現れ出ないとするならば、それは、ウェスト・エンドを行進する洗練が小さな少年少女という古い人種を踏みつぶし、唯一の子ども時代を溺愛されて送るだろう小さくてかわいい大人の男女に取って代えてしまうからである。(Escott 124)

この考えに従えば、不利な状況に置かれているのは、中・上流階級の子どもということになる。社会改革者たちの目に労働者階級の少年は、リスペクタビリティに縛られるあまり生じる無感動や無気力といった弊害から自由な、文明化によって去勢されていない、原始の少年時代を体現していると映ったのだった。国教会高教会派が設立したオックスフォード・ハウスのレジデントとして1893年にベスナル・グリーンに赴いた貴族ヒュー・レッグ (Hugh Legge) は、礼儀正しい少年よりも、普通の下層の少年とは違う「粗暴な少年」“rough lad”に興味を抱く。自らが設立したレプトン・クラブで彼が求めた少年たちは、「害のない人々を襲い、警察とごたごたを起しさえすることで知られていた」(133)。この種の少年たちが持つ強健な身体や勇気を賞賛する彼は、「彼らは、軍隊を大いに補充強化する類の少年たちである——丈夫で屈強な彼らは、勇気に満ち溢れ、第一級の戦闘能力を備えている」(134)と結論づける。要するにレッグは、こうした少年たちの姿から、民主主義を担う将来の世代に楽天的でロマンティックな夢を抱くのである。

セツルメント活動家が少年たちと日々密接な関係にある以上、そこに性的要素が入り込む可能性があることは否定できない。同性愛の社会主義者エドワード・カーペンター (Edward Carpenter, 1844-1929) を崇拜するC・R・アシュビー (Charles Robert Ashbee, 1863-1942) の場合、彼は、貧民教育に審美的経験を重視するトインビー・ホールのレジデントだった1888年に、手工芸ギルド・学校 (Guild and School of Handicraft) を設立し、少年たちに金属細工術やデザインの実践技術を教え、ラスキンの手工芸品生産に関する考えを説く。その一方で、カーペンターによって唱えられた、階級の壁を越えた男同士の友情が社会変革をもたらすというヴィジョンを吹き込んだのだった。ケンブリッジ大学で自らの同性愛的な性癖と葛藤しながらイースト・エンドにやって来たアシュビーにとって、少年たちとの付き合いは、プラトニックなものにせよ、彼に性的満足感を与えてくれるものだった。少年たちとの友情は、彼が社会改革を推し進める上での触媒となったのである。

コクニーの少年たちに対してアシュビーが抱いたような熱情は、スラムで博愛主義運動に従事する多くの男性に大なり小なり見られたものだった。彼らは、少年の活力を人間の潜在エネルギーの証として理想化したのである。1889年から97年にかけてオックスフォード・ハウスの館長だったウィントン・イングラム (Winnington Ingram, 1858-1946) は、少年たちの



間で働くことに強く引き付けられ、彼らの感受性や愛情は「女性のそれを遥かに超えている」(Colson 32)と信じていた。少年たちは、異性愛主義に違和感を覚えるエリート男性の想像力に訴えたのである<sup>5)</sup>。マーサ・ヴィシナス (Martha Vicinus) は、少年は一種のファム・ファタールであり、エロティックでかつ利他的な欲求のアイコン的対象となっていたと論じる (90-114)。少年たちとのこのような関係を見てゆくと、セツルメント活動家たちははたして道徳的に純粋なのかという疑問が生じてくる。彼らは貧富の差が引き起こす社会の傷を癒すためにイースト・エンドにやって来たわけだが、彼らの中には、己自身の性的関心と折り合いをつける必要に突き動かされて慈善活動に従事する者もいたのである。

もちろんほとんどのセツルメント活動家、特に、その友愛の概念に性的感情が含まれていないのを知って憤慨したアシュビーが袂を分かった、トインビー・ホールの創設者サミュエル・A・バーネット (Samuel A. Barnett, 1844-1913) のような指導者たちは、男性の友愛と同性愛との曖昧な境界を取り締まることの重大さを認識していた。その傾向はワイルド裁判によって 1890 年代中頃からますます強まる。ワイルド裁判は、エリート男性、特に「審美家」と、貧しいスラムの若者との間に同性愛が広がっているのではないかという疑惑を世間に生じさせたのだった。W・T・ステッドが恐れたのは、「オスカー・ワイルドのような事件があと 2 つか 3 つ」世間の知るところとなれば、せっかくイギリス「国民」に役立っている「自由な仲間関係」がひどく損なわれてしまう、ということだった (Weeks 21)。

さらに、1899 年から 1902 年にわたるボーア戦争時に見られた原始的な感情の発露、すなわち、マフェキングの解放のニュースがもたらした群衆の暴力と若者の無秩序な行為は、イギリスの下層階級の退化を衆目のもとに晒し、大英帝国の将来に不安の影を投げかけた。今や粗暴な少年を管理するのが、国や帝国の命運を左右する鍵となる。もはやレッグのように、社会の必然的な進歩を楽観的にリベラルな立場から信じているわけにはいかなかったのだ。粗暴な少年たちはフーリガンと言い換えられ、彼らの増殖を防ぐことがボーア戦争後の 10 年間で社会改革者たちの間での喫緊のテーマとなったのである。したがって、E・J・アーウィック (Edward Johns Urwick) が述べるように、「天使」と「野蛮人」の二つの要素を併せ持つ少年を正しく導き、国家に有益な大人に仕立てあげてゆくことが非常に重要となる。

少年の心は半ば天使であり半ば野蛮人であると言われている。私たちは、少年には中途半端な色合いなどないと考えている。光と影はくっきりと浮き出ているのである。一見したところ野蛮人的な要素であるけばけばしい光だけが現れるが、天使の要素であるよりきめ細かい影から成る豊かな背景があるのだ。そしてそれは、熟練した腕が前面に引き出し発達させてくれて、最終的には二つの要素が結合して調和のとれた性格を形作るようになるのを待っているのである。そこにこそ、この仕事の魅力がある。(xiii-xiv)

少年と大人の関係において権力は「熟練した腕」の持ち主である大人にあり、「魅力」は、まだ「心の底では」(xiii) 少年ながら大人になりたがっている彼らの性格を形作る可能性にある。この可能性への挑戦、そしてこの挑戦がもたらす人間的触れ合いこそが、しばらくの間にせよ、都市の労働者階級の中で生活しようと決めた人々の人生に意味を与えることになる。しかし、そうした教育は、これまで社会改革者たちが蔑んできた敬意、服従、リスペクタビリティといった家父長制社会の規範、言い換えれば堅苦しさを教え込むことであり、その成功は「粗暴な少年」礼賛を自ら放棄することを意味する。80年代から90年代に見られた紳士と少年との間の危険な側面を孕んだ友愛に国の将来を託すという考えは影を潜め、改革者たちは、父と息子と国家という明らかに男性的で、おそらく家父長的な男性の共同体の形成を目指すようになるのである。

### むすび

文学作品や絵画などに描かれたロンドンの貧しい子どもたちに対する憐れみと恐怖といった捉え方から分かるように、中心世界は彼らを救済しようとしながらも、距離を置いて「異質なもの」として眺めようとしていたことが分かる。そうした眼差し自体が、利己主義と利他主義の緋い交ぜになった勝手な捉え方に過ぎない。子どもたちを、犠牲者や野蛮人として捉えることは、現実を必ずしも直視していないのである。それは、ダニエルズやマルレディの絵に描かれた子ども像と、バーナードの写真の子ども像とを比較してみればよく分かる。ダニエルズの涙を流す少女の絵と、バーナードのセアラ・バーズの写真（“Sarah Burge,” Jan. 5, 1883）〔図8〕とでは、驚くほどの相違がある。後者に見られる意志の強さと毅然とした態度に自己憐憫はなく、前者が帯びる逃避的な感傷主義を際立たせる。現実の子どもは憐れみを切望しているのではなく、ペーソスは社会的強者が、罪悪感と自己満足のために対象に勝手に押し付けたものに過ぎないのだ。8歳のクレソン売りの少女はメイヒュー（おそらくヘンリーの弟 Augustus Septimus Mayhew, 1826-75）に、「あたいは寒さに耐えるよ——だって、そうしなきゃいけないんだ。〔……〕 ないよ、子どもが泣いている姿なんて全然見たことないよ——だって、そんなことしたって無駄だからね」（1: 151）と語っている。

世紀末になるにつれて盛んになるセツルメント活動においても、労働者階級の子どもたちへの眼差しには、自分たちが理想とする子ども像が重ね合わされている。確かに、エリート男性たちは、イースト・エンドという粗野で無秩序な世界に入って生活をし、富める者と貧しき者、西と東との間の架け橋になろうとし、中・上流階級出身ゆえの限界があるにせよ、より民主主義的な社会を目指した。そこで子どもたちとの生活は、彼らに、家父長制社会の価値観に縛られてきた自分たちが被ってきた仮面を捨て去り、社会的・政治的に、そして性の面でも、自己を見つめ直す契機となったのである。無秩序の中に身を沈めることは、再生への手段となる



〔図8〕“Sarah Burge” (1883)

のだ。だが、セツルメントもまた、リチャード・ホワイティング (Richard Whiteing, 1840-1928) のスラム小説『ジョン通り5番地』(No. 5, *John Street*, 1899) の言葉を使えば、労働者階級の生活を覗き見るための単なる「覗き穴」(11) でしかなく、少年たちとの間に求めた友愛生活の裏面に利己的な性的感情すら読み取れるのである。

ディケンズ作品に顕著に見られたような、浮浪児に対する憐れみや恐怖といった感情に大きく左右された時代は、1870年代から80年代に最高潮に達した後、世紀転換期が近づくにつれて終焉を迎える。それは、子どもたちの救済が、市民の懐に訴える様々な宗教団体の活動から、制度上の管理体制の中に組み込まれてくるようになる流れに連動している。アーウィックによれば、1904年までにロンドンの通りでは浮浪児の姿はほとんど見られなくなる。

カラーとネクタイが、数年前にぼろ着がそうであったように、今やほとんど普通になっている。大衆が思い描くような裸足の浮浪児像は、依然として善良な博愛主義運動の口絵を飾るのだが、もはや通りで普通に見られる光景ではない。浮浪児はロンドンの幾つかの最貧困地区、特にアイルランド人居住区で時々見られるが、そこでさえ、寄宿学校がもたらす文明化の影響によって、普通ではなく例外的なものになってしまったのである。(xi)

しかしながら、子ども時代を美化し子どもらしさを感傷的に眺める姿勢は止むことなく、形を変えて生き残る。セツルメント活動に従事したアーウィックやC・F・G・マスターマン(Charles Frederick Gurney Masterman, 1873-1927)は、「浮浪児」という語は避けつつも、「浮浪児物語」とは比べものにならないほどの、子どもに対する深い思いを表現する。このように子どもに対する眼差しは、時と共に変化しながらも、そこには、子どもの実態を直視するというよりはむしろ、見る側の願望や欲求や自己満足が投影され続けるのだ。それが子どもを貧困や無知から救済するという効果をもたらしたのは事実だが、一方で、結局のところ、無償と見えても、無私を装うものほど自己愛の満足に過ぎないという疑念は拭えない。利他主義に基づく博愛行為には、程度の差こそあれ、利己主義に根差した偽善が背後で蠢いているのである。

#### 【付記】

拙論は、2013年10月19日に西南学院大学(福岡)で開催されたディケンズ・フェロウシップ日本支部秋季総会のシンポジウム「イースト・エンドへの眼差し——ディケンズから世紀末へ」のパネリストとして発表した原稿に加筆修正を施したものである。

#### 【注】

- 1) 19世紀の半ば前後、ロンドンや他の都市にはおびただしい数の浮浪児が通りに溢れていた。その主たる原因として、急激な都市化が挙げられる。それは、富と共に貧困をもたらしたのだった。雇用環境は不安定なものとなり、大人の中には職場での事故で若くして亡くなる者が多く、男たちは入隊したり、仕事を探しに出かけて戻って来なかったりして、家族が崩壊していった。その結果、多くの浮浪児が生じたのだった。孤児になった者もいたが、実の親や継親の飲酒や暴力に耐えかねて家を飛び出した者もいた。これらの子どもたちは、自分一人で生きてゆくために、富裕層が泥道を通る際に靴やスカートが汚れないように掃除をしたり、メッセージを伝えたり、側転をしたり、またマッチや果物や花を売ったり、市場で残飯を漁ったりテムズ河の岸辺で金目の物を探し回った。また、機会さえあれば、物乞いをしたり盗みやスリも働いた。こうした浮浪児に対して中心世界は、憐れみと恐怖を抱いたのだった。Davin 70を参照のこと。
- 2) ぼろ着というのは、少女が貧困状態にあることを表すのみならず、純潔や無垢が帯びる性的含意を示唆する。1885年に、社会改革を推進するジャーナリストW・T・ステッド(William Thomas Stead, 1849-1912)は『現代のバビロンにおける乙女の貢物』(*Maiden Tribute of Modern Babylon in the Pall Mall Gazette*, July 1885)で白人少女売春を糾弾するのだが、ぼろ着は少女がその犠牲者になる危険性をもたらすのである。半裸の子どもが帯びるエロティックな力をよく理解していたのは、ルイス・キャロルことC・L・ドジソン(Charles Lutwidge Dodgson, 1832-98)だった。彼は1858年に、クライスト・チャーチの学寮長の娘アリス・リデル(Alice Liddell, 1852-1934)にぼろ服を着せてポーズを取らせ、写真を撮った。四肢を露わにした彼女の姿は、憐れみを喚起するどころか、見る者の性的好奇心を引き起こすのである。マリオ・ペルニオーラ(Mario Perniola)が述べているように、「具象的芸術にあって、エロティシズムは着衣と裸の関係として現れる。したがって、それは一つの状態から他の状態への動き——変化——の可能性次第なのである」(237)。
- 3) 浮浪児をアラブ人に譬えた人物として、貧民学校連合の議長を40年以上の長きにわたって務めたアシュリー卿(Anthony Ashley Cooper, 1801-85)が挙げられる。彼は青白く虚弱な浮浪児に同情しつつも、彼らを「大都市のアラブ人」(139)と呼び、社会にとって危険な存在であると見なした。アシュリー以上に両者の結び付きを世間に広めたのが、エディンバラにおける貧民学校の創設者トマス・ガスリ(Thomas Guthrie, 1803-73)だったが、おそらく二人に影響を与えたのは、1840年代半ばに出版され

た2冊の書物だったと考えられる。その書物とは、A・W・キングレイク (Alexander William Kinglake, 1809-91) の『イオセン』(Eothen, 1844) とエリオット・ウォーバートン (Eliot Warburton, 1810-52) の『三日月と十字架』(The Crescent and the Cross, 1845) であり、どちらも1834年の中東での旅を記したものである。キングレイクは砂漠で出会ったアラブ人に浮浪児との共通点を見出している: 「彼の焼き方は、子どもたちがクリを炒る技術や神秘さにそっくりである。食べるのに適した場所を選ぶときにも同じような用心深さや慎重さが見られるし、指でクリを摘み出す際の方法や自己犠牲的な勇氣も共通している」(142)。

- 4) スタート神父のモデルになったのは、オールド・ニコルを含む教区を管轄するジェイ牧師 (Rev. Arthur Osborne Jay, 1858-1945) だった。彼はモリソンの『みすばらしい通りの物語』(Tales of Mean Streets, 1894) に描かれたイースト・エンドが実態を反映したものであるとして賞賛し、当時子どもに遺伝や環境が及ぼす影響を探る小説の執筆を計画していたモリソンを、自分の教区に実地調査のために招待した。ジェイ牧師は自分の教区で純粋に宗教的な教えを説くことは無益だと悟り、御しくい会衆に接するための独特の方法を次第に編み出すようになった。社交クラブを設けたり、ボクシング試合を開催してしばしば彼自身も参加した。そして、住民が用いる犯罪用語や習慣を苦心して習得したのだった。『ジェイゴーの子ども』に描かれた貧民の生活に関して批評家からその信憑性について疑問の声が上がったとき、彼はモリソンを熱心に弁護した。そこに上げられた労働者は全体のほんの一部であることを二人は十分に承知していたのである。ただし、その一部は、見苦しくない生活を送る隣人の幸福を常に脅かす存在ではあったのだ。Keating 177-78 を参照のこと。
- 5) 少し時代は下るが、E・M・フォスター (Edward Morgan Forster, 1879-1970) の小説『モーリス』(Maurice, 1913-14 執筆・死後出版) においても、恋人だったクライヴ (Clive) が女性と結婚したことに衝撃を受けたモーリスが、スラムでの慈善活動に従事する様子が描き出される。

彼は国防義勇軍に入った。これまで彼は、祖国を救うのは徴兵制度だけとの見地から入隊を遅らせていたのである。また、教会の社会事業にさえ手を貸すようになった。南ロンドンにあるカレッジ・セツルメントで青少年と一緒にサッカーをやるために土曜日のゴルフをやめた。水曜の夜は夜で、同じ連中に算数とボクシングを教えることにした。通勤列車の仲間たちは少し疑っていた。ホール〔モーリスの姓〕が真面目になっただと！ モーリスは慈善事業にもっと寄付するために小遣いを節約するようにもなった。慈善といってもモーリスのつもりではまだ墮ちきっていない連中を救うための慈善であり、墮ちてしまった連中のためになどびた一文出す気はなかった。こういった活動と株式仲買の仕事とでモーリスは自分に暇を与えないことに何とか成功した。(126)

モーリスは、少年たちとの交わりを通して、性的欲求を昇華させるのである。

#### 【引用・参考文献】

- Andrews, Malcolm. *Dickens and the Grown-up Child*. Basingstoke: Macmillan, 1994.
- Barnardo, Mrs. and James Marchant. *Memoirs of the Late Dr. Barnardo*. London: Hodder and Stoughton, 1907.
- Beggs, Thomas. *An Inquiry into the Extent and Causes of Juvenile Depravity*. London: Charles Gilpin, 1849.
- Boone, Troy. *Youth of Darkest England: Working-Class Children at the Heart of Victorian Empire*. New York: Routledge, 2005.
- Colson, Percy. *Life of the Bishop of London: An Authorised Biography*. London: Jarrolds, 1935.
- Coveney, Peter. *The Image of Childhood: The Individual and Society: A Study of the Theme in English Literature*. Baltimore: Penguin, 1967. [カヴニー、ピーター『子どものイメージ——文学における「無垢」の変遷』江河徹監訳、紀伊國屋、1979]
- Davin, Anna. "Waif Stories in Late Nineteenth-Century England." *History Workshop Journal* 52 (2001): 67-98.
- Dickens, Charles. *Bleak House*. 1852-53. Oxford: OUP, 1978. [ディケンズ、チャールズ『荒涼館』青木

- 雄造・小池滋訳、全4巻、ちくま文庫、1992]
- . *The Haunted Man*. 1848. *The Christmas Books*. Vol. 2. Ed. Michael Slater. Harmondsworth: Penguin, 1977. 2 vols. [『憑かれた男』藤本隆康他訳、あぼろん社、1982]
- . *The Speeches of Charles Dickens*. Ed. K. J. Fielding. Oxford: OUP, 1960.
- Escott, Thomas Hay Sweet. *Social Transformations of the Victorian Age*. London: Seeley, 1897.
- Forster, Edward Morgan. *Maurice*. London: Penguin, 2005. [フォースター、E・M『モーリス』片岡しのぶ訳、扶桑社、1988]
- Houfe, Simon. *John Leech and the Victorian Scene*. London: Antique Collectors' Club, 1984.
- Keating, P. J. *The Working Classes in Victorian Fiction*. London: Routledge & Kegan Paul, 1971.
- Kinglake, Alexander William. *Eothen*. 1844. London: Dent, 1914.
- Legge, Hugh. "The Repton Club." *The Universities and the Social Problem: An Account of the University Settlements in East London*. Ed. John Matthew Knapp. London: Rivington, Percival, 1895.
- May, Phil. *Gutter-snipes*. 1896. New York: R. H. Russell, 1899.
- Mayhew, Henry. *London Labour and the London Poor*. 1861-62. Vol. 1. London: Frank Cass, 1967. 4 vols.
- Morrison, Arthur. *A Child of the Jago*. 1896. Oxford: OUP, 2012.
- . "Whitechapel." *The Palace Journal* 24 Apr. 1889. <<http://www.mernick.org.uk/thhol/alwhite.html>>.
- Perniola, Mario. "Between Clothing and Nudity." *Fragments for a History of the Human Body*. Ed. Michel Feher. Cambridge, MA: MIT, 1989.
- Pinchbeck, Ivy and Margaret Hewitt. *Children in English Society*. Vol. 2. Toronto: U of Toronto P, 1973. 3 vols.
- Stallybrass, Peter and Allon White. *The Politics and Poetics of Transgression*. Ithaca: Cornell UP, 1986. [ストリブラス、ピーター/アロン・ホワイト『境界侵犯——その詩学と政治学』本橋哲也訳、ありな書房、1995]
- Stretton, Hesba. *Jessica's First Prayer*. 1867. Philadelphia: Henry Altemus, 1897.
- Urwick, Edward Johns, ed. *Studies of Boy Life in Our Cities*. London: Dent, 1904.
- Vicinus, Martha. "The Adolescent Boy: Fin de Siècle Femme Fatale?" *Journal of the History of Sexuality* 5 (1994): 90-114.
- Wagner, Gillian and Valerie Lloyd. *The Camera and Dr. Barnardo*. London: National Portrait Gallery, 1974.
- Warburton, Eliot. *The Crescent and the Cross: Or, Romance and Realities of Eastern Travel*. 1845. Memphis, TN: General, 2012. 2vols.
- Weeks, Jeffrey. *Coming Out: Homosexual Politics in Britain, from the Nineteenth Century to the Present*. London: Quartet, 1977.
- Whiteing, Richard. *No. 5 John Street*. London: Grant Richards, 1899.
- 田中孝信「放浪者への眼差し——その秘められた欲求」、『ヴィクトリア朝の都市化と放浪者たち』、武井暁子・要田圭治・田中孝信編、音羽書房鶴見書店、2013、215-55。
- 松村昌家編『子どものイメージ——十九世紀英米文学に見る子どもたち』、英宝社、1992。

【2014年9月9日受付, 11月6日受理】

## Philanthropy or Pharisaism?: Images of Poor Children in Nineteenth Century London

TANAKA Takanobu

Such street Arabs as the crossing sweeper Jo in *Bleak House* caused both sympathy and fear in the central world constituted of the upper and middle classes. But other feelings can be thought to have been contained in the dominant view of those children. This paper first explores the images of London's poor children as the object of sympathy and fear in various texts, photographs, and paintings, and then approaches other feelings through the relationship between elite men who worked at settlements and boys in the fin-de-siècle East End. As a result, it is made clear that the central world regarded poor children as heterogeneous. In this subjective view were mingled selfishness and altruism. Even sexual feelings can be read behind the friendship-love elite men aspired to establish with boys and young men. Their wishes and desires were reflected in their views. It is true that charitable activities brought about the effect of saving children from poverty and ignorance, but at the same time the doubt that those seemingly selfless activities might be essentially so selfish as to satisfy self-love can never be dismissed. Behind philanthropy based on altruism does more or less wriggle pharisaism deriving from egotism.